# 国語総合

次の文章は、海野聡『森と木と建築の日本史』からの一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、原則として句読点やカッコは一字に数えます。

森林と人とのかかわりには長い歴史がある。そもそも人類はさまざまな周辺環境に適応し、身近な自然界に存在する物質を利用してきた。川や池、地下水などの水、海の魚や貝、塩はもちろん、森から生み出される林産資源、動物資源もまた人びとの生活を支えており、なかでも木は身近な材料であった。自然界には木のほかにも石・土・草など、数多くの自然材料が存在する。いっぽうで加工道具が未熟な社会にあって、日本に限らず、森林環境に恵まれた地域では、加工のしやすい木は広く用いられた。そのため世界中に木の文明は存在するのであるが、日本は木の扱いの巧みさにおいて、とくにヒイ(ア)でており、さらに木に対する愛着も強い。

日本でも二〇世紀後半以降、鉄・ガラス・コンクリート・プラスチックなどで作られた物が溢れており、都市部で森林のめぐみを感じることは少ないかもしれない。いっぽうで、日本の生活のなかに木はイゼン(イ)として浸透している。現在も低層の戸建住宅の八割以上は木造住宅であるし、木の存在感を強調した現代建築を造る日本人建築家も少なくない。身のまわりを見わたすと、箸や椀にも木製のものは多くあるし、机や椅子などの家具が木製であることも多かろう。嫁入り道具としての桐の箪笥は近年、珍しいが、檜風呂、杉の曲げわっぱの弁当箱などは今でも根強い人気がある。さらに木製の眼鏡フレームまで愛好者がおり、木を使った品々は生活に根付いている。こうした木と日本人のかかわりの歴史は長く、容易に手に入る豊かな森林資源に囲まれた環境が巧みな木材利用と優れた木の文化を育(a)んできたのである。

人類は森林から木材のみを利用していたわけではなく、日本でも森林の恩恵は多岐(b)にわたる。とくに、水稲(c)農耕以前の縄文時代

には、定住がすすんで集落が形成されるようになり、漁撈や狩猟もおこなわれていたが、これらから得られる動物性食品以上に、植物は主たる食べ物であった。とりわけ森林のもたらす食のめぐみは貴重で、クリ・クルミ・トチノキなどの木の実は重要な栄養源であった。木の実以外にもウド・ワラビなどの山菜やヤマイモ・ユリの根などの根菜も縄文時代の遺跡から発見されており、多くの森林のめぐみを［　A　］していたことが知られる。

採集の目的は食料の確保に限らない。堆肥のための落葉などの利用や薪の採集なども重要である。これらのほか、木の利用という点では漆もその一例である。漆はウルシの樹木から採取した樹液を加工したもので、塗料や接着剤として使われ、現在は樹皮を傷つけて生漆（きうるし）を採集する。漆の歴史は長く、当時の採取方法は明らかではないが、縄文時代早期の集落である垣ノ島遺跡（北海道函館市）の土坑墓からは副葬品の世界最古の漆製品が出土（d）している。また同遺跡からは縄文後期の注口土器（ちゅうこうどき）も出土しており、これは黒漆の上に赤漆を塗っている。現在ウルシは日本・中国・朝鮮半島に［　B　］しているが、元来、日本には自生していなかったとされる。しかし、ウルシの花粉分析によって、縄文時代早期後葉以降、縄文時代を通して東日本から北日本に存在していたことがわかっている。現に多数の縄文時代の漆製品が北海道から北陸までの各地で出土しており、集落の近郊にウルシの木が存在していたとみられる。

とくに北海道南部の遺跡でみられる漆塗り装身具は、コハクやヒスイと同じく威信財（あ）とみられ、階層社会の存在を示している。これもひとつの木の文化といえよう。このように縄文時代にはすでに、生活ヒツジュ（ウ）を超えた森林の利用がなされていたのである。

かつて縄文時代の人びとは狩猟採集民で農耕をおこなわなかったと考えられていたが、ダイズ・アズキなどの豆類は縄文時代前期から栽培されていることが、考古学的検討により［　C　］してきている（小畑弘己『タネをまく縄文人』）。また、日本には自生しないヒョウタン・シソ・エゴマなどが遺跡から出土しており、これらも海外から持ち込まれ、栽培されていたと考えられる。

栽培の対象は樹木にも及んでおり、三内丸山遺跡（青森市）では花粉分析からクリの管理栽培が明らかになっている。また観音寺本馬（ほんま）遺跡（奈良県橿原市）でも、ジンイ（エ）的に造られたクリ林が確認されている。クリは果実と木材の両面で有用であったうえに、鉄器のない時代にあっても、斧による伐採（e）は容易であり、縄文人にとって身近な木であった。また考古植生学の立場からは、上述の

ウルシも栽培されていたと考えられる(工藤雄一郎編『縄文時代の人と植物の関係史』)。すでに縄文時代の人びとは、自然の木々を一方的に利用するだけではなく、育成することで森林に干渉し、共生していたのである。

日本人は山や森林に対する深い信仰を持ついっぽうで、森林を消費し、変化させてきた。縄文時代に人口が増加し、集落が拡大するにつれて、日常生活用の燃料、生活用具の材料、住居用の建材などの目的で集落周辺の木々を利用するようになる。木材利用というと建築用が使用量の大半を占めるというイメージもあろうが、その割合は必ずしも多くない。縄文時代の住居の規模は小さく、その柱径は約一〇cmと比較的、細い。そのうえ一時的な消費ではなく、一定期間の耐久使用であるため、耐用年数を考慮すると、住居用の木材の使用量は比較的少ないのである。むしろ恒常的な使用、すなわち炊事・暖房などの生活で用いられる薪の量の方がボウダイであり、森林に与える影響も大きい。このほかにも土器焼成や製塩など、集落単位の活動でも薪は消費されており、住居や木製品に用いられる木材の量はむしろ限定的であったとみられる。

縄文時代の木製品については、鳥浜貝塚遺跡(福井県若狭町)から一四〇〇点にものぼる大量の加工材が出土しており、その用途や用材を知ることができる。出土木製品の構成は杭や板、大きな木材を楔などを用いて繊維方向に割った割材などの部材が多いものの、弓柄・尖棒・漆器・容器・櫂など、性格のはっきりしたものも多い。樹種をみるとスギが多く、この時代に自然木として豊富に存在したとみられる。スダシイ・アカガシなども含まれるが、やはり周辺の自然木を手近に利用したのであろう。いっぽうで、当時の植生ではモチノキ・トネリコなども多かったとみられるが、これらの利用は少ない。モチノキは小径木が多いことから用いられなかったのであろうが、トネリコは約一五mの高さまで伸び、樹径もある程度の大きさまで成長し、加工も比較的、容易である。それにもかかわらず、中高瀬観音山遺跡(群馬県富岡市)などの一部の遺跡を除いて出土例は少なく、トネリコを積極的に用いていないことから、意識的に木製品に適したスギを好んで選択していたと考えられる。

木材使用量の面ではこれら木製品の与える影響は薪ほど大きくはないが、文化的側面からは重要である。木製品は木材を加工する石斧の柄、土木用の杭、弓、容器、板などの比較的小規模のものが多いが、大型の木製品である舟は巨木との関係も深く、木の文化を考えるうえで興味深い。

縄文時代の舟は巨木を刳りぬいた丸木舟で、全国で約一五〇艘以上がみつかっている。鉄器のない時代にあって、どのように丸木舟を加工したかという点について述べておきたい。日本最古の丸木舟が雷下遺跡(千葉県市川市)から出土しており、約七五〇〇年前の縄文時代早期中葉のものとされる。ムクノキを刳りぬいたもので、全長七・二m以上、幅約五〇cmが遺存しており、厚みは五〜八cmあり、大型の舟であったとみられる。

この遺跡ではクロダイ・スズキ・ボラ・フグなどの魚類の骨が出土しており、大多数を占めるハイガイの存在と合わせて、丸木舟に乗って漁撈にいそしむ縄文人の姿が目に浮かぶようである(沖松信隆「雷下遺跡の概要」)。

この丸木舟の形状は、縄文時代後期のものとは大きく異なる。後期のものは底が平滑で、側面部との間に稜線(角の部分)が出る形状であるが、この雷下遺跡の丸木舟の底面は年輪に沿った曲面である。木の繊維を切断して加工するのではなく、年輪に沿って加工したのであろう。さらにこの丸木舟の内側には加工痕跡が多く残っており、焦げ跡が確認できることから、火で焦がしながら、石器で丸太を刳りぬく方法で製作されたとみられる。このように大型の丸木舟を造り上げる技術はすでに縄文時代早期に存在しており、巨木による丸木舟が生活を支えていたのである。

いっぽうでこれらの刳りぬきの丸木舟は、木材加工の技術が未熟であったことや精度の高い材の組みあげが難しかった状況を示している。すなわち、小さい材を精度良く加工して組み合わせることで、水の入らない舟を造り上げることができるのであれば、手間がかかる巨木を利用するよりも、伐採・運搬・加工のいずれの点でも合理的かつ効率的であろう。しかし縄文時代の舟は刳りぬきの丸木舟なのである。つまり精度の高い材の組み合わせの技術がないがゆえに、一木の巨木から刳りぬくことで継ぎ目のない丸木舟を造らざるを得なかったと考えられる。時代の下った古墳時代には一〇mを超えるものもあり、前後継ぎとして複材刳舟とすることもあった。むろん、奈良時代の平城宮内裏の刳りぬきの井戸のように、威信財として巨材から作り出すことに意味を見出すこともあるが、古墳時代以前の刳りぬいた丸木舟は、加工・実用の両面でメリットがあったのであろう。

丸木舟の有効性のひとつは壊れにくく、沈みにくいという特性である。一木から刳り出すため、大型化という点では限界があるが、施工精度の悪さによる水漏れなどの心配もなく、また継ぎ目が無いことから強度も高いのである。そのため、大型船が造られ

るようになってからも丸木舟は造り続けられ、琉球では近世にも丸木舟が使用されていた。なかにはアイヌのまるきぶね(河沼用、大正時代)や美保(みほ)神社(松江市)の神事で使われる諸手舟(もろたぶね)(一九七八年)などのように、重要有形民俗文化財に［　D　］されているものもある。

＊海野聡『森と木と建築の日本史』（岩波書店）より問題作成上、文書の一部を省略・変更しています。

問題

問1　┃線ア～オのカタカナを漢字になおしなさい。

問2　┃線a～eの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問3　A ～ D に入れるのにふさわしい語をそれぞれ次から選び、番号で答えなさい。同じ番号は一度しか使えません。

1　影響　2　享受　3　指定　4　判明　5　分布

問4　この本文で「漆」と「ウルシ」はどのように使い分けられていますか。

問5　┃線あ「威信財」とは何ですか。本文の内容に合うものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　信仰の対象になるもの
2　他者への脅しや威嚇に使うもの
3　美しさを誇示するためのもの
4　地位の高さを示すためのもの

問6　┃線い「住居用の木材の使用量は比較的少ない」とありますが、そのように判断できる理由を二つ書きなさい。

問7　‖線う「この」は何を指していますか。

問8　‖線え「どのように丸木舟を加工したか」について三十字程度でまとめなさい。

問9　‖線お「加工・実用の両面でメリットがあった」とありますが、どのようなメリットですか。

問10　縄文時代は森林の恩恵をどのように生かしていましたか。従来考えられていた縄文時代のイメージとの違いに触れながら、百五十字以上二百字以内でまとめなさい。